平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	山口大学教育学部附属特別支援学校
-----	------------------

I 概要

1 事業の概要

山口大学教育学部附属特別支援学校(以下「本校」という。)では、障害者(児)の余暇活動の機会の確保、参加者同士の交流による自立や社会参加の促進を目的に、平成27年度「スポレク★くらぶ」という名称の障害者(児)を対象としたスポーツ・レクリエーション活動を開始した。一定の成果を上げた一方で、活動自体が障害のある人を中心とした活動であること、取組が地域に広がっていないことが課題として挙げられた。

そこで、本事業では、この「スポレク★くらぶ」の取組をベースに、障害のある人とない人との交流及び共同学習に発展させること、学校から地域へ取組を広げていくことを目指し、本校が所在する平川地域の小学校・中学校・高等学校に障害者スポーツを通じた交流及び共同学習の実施を呼びかけたところ、どの学校からも積極的に実施したいと回答を得た。よって今年度は、本校小学部・高等部の児童生徒と山口市立平川小学校4年生児童、本校中学部生徒と山口市立平川中学校1年生生徒、本校高等部生徒と山口県立西京高等学校体育コース2・3年生生徒が風船バレー、卓球バレー、ボッチャの3種目のスポーツを一緒に体験しながら交流を深めた。また、4校合同で、リオパラリンピック視覚障害柔道日本代表選手の講演会及び交流会を実施し、「あきらめないこと、感謝する気持ちを持ち続けること」等の大切さを学ぶとともに、児童生徒間の交流を一層深めることができた。

本事業に参加した児童生徒に学校間の交流活動や交流会についてアンケートを実施し、その結果を含めて実践報告としてまとめ、県内の特別支援学校及び山口市内の小・中学校等に発信した。

2 事業の成果

(1) 障害者スポーツを通じた交流及び共同学習の取組

本校小学部児童・高等部生徒と山口市立平川小学校4年生児童とのスポーツ交流活動(5回)、山口大学教育学部附属特別支援学校中学部生徒と山口市立平川中学校1年生生徒とのスポーツ交流活動(5回)、本校高等部生徒と山口県立西京高等学校体育コース2・3年生生徒とのスポーツ交流活動(1回)の計11回実施した。種目は、本校の「スポレク★くらぶ」で行っている、風船バレー、卓球バレー、ボッチャの3種目にするこで、特別支援学校の生徒が自信をもって交流活動に参加できるようにした。

ア スポーツ交流活動

- ・はじめの会では、本校生徒が司会進行をした。また、両校の代表児童生徒があいさつをした後、チームごとに分かれて自己紹介、スポーツ交流を行った。
- ・風船バレーは、まず本校生徒がルール説明を行った。平川小学校との交流では、平川小学校児童に、これまで体験してきたバレーボールのルールとは異なることに戸惑いが見られ、初めはなかなか上手くできなかったが、少しずつ声を掛け合いながらパスをつなげられるようになった。また、西京高校との交流では、西京高校生徒が落ちそうな風船を見事に拾い上げる状況に刺激され、本校生徒も一生懸命風船を追いかける場面が見られた。
- ・卓球バレーは、小・中学生は初めて体験する種目だったが、理解しやすいルールだったため、本校児童生徒と同じチームで競技しながらすぐに打ち解け、声を掛け合いながら楽しく活動することができた。また、激しいラリーが続いた後はお互いに歓声上がることもあった。

- ・ボッチャも本校以外の児童生徒は初めて体験する種目だった。競技のルールを本校生徒が説明し、どの児童生徒も真剣に聞いていた。赤チームと青チームに分かれ、ジャックボール（的玉）を目がけて集中して投げ、上手く投げられたときは、双方から大きな歓声が上がって喜び合った。平川中学校の生徒の中には本校生徒の投球方法を真似して投げ、そこから関わりが深まる場面も見られた。
- ・おわりの会では、両校の代表児童生徒が、感想を発表した。初めはお互いに緊張していたが、スポーツをしながら交流することで、おわりの会では笑顔で接している姿が多く見られた。また会の最後の写真撮影時に互いの生徒が自然と関わり合う姿や帰る際にお互いに声を掛け合い手を振る姿が見られたことから楽しく活動できたことがよくわかり、交流が十分に深まったことがうかがえた。

イ 実施後のアンケート結果

① スポーツ交流会において、楽しく交流活動ができたか

4校ともほとんどの児童生徒が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。特に西京高校は、9割以上の生徒が「とてもそう思う」と回答した。

② スポーツ交流会で行った風船バレーやボッチャ、卓球バレーなどの障害者スポーツに興味をもったか

平川小学校、平川中学校と本校は、ほぼすべての児童生徒が、「とても興味をもった」「まあまあ興味をもった」と回答した。西京高校は9割以上の生徒が、「とても興味をもった」と回答した。

③ 他校の友達と仲良く活動できたか

4校とも9割以上の児童生徒が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

④ 他校のことをよく知ることができたか

平川小学校、平川中学校と西京高校は、9割以上が、「よく知ることができた」「まあまあ知ることができた」と回答した。本校は、7割以上が「よく知ることができた」「まあまあ知ることができた」と回答した。

⑤ またスポーツ交流会に参加したいと思うか

平川小学校はほとんどの児童が、平川中学校、西京高校及び本校は8割以上が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

⑥ 同じ地域にある学校の友達と一緒に活動することはよいことだと思うか

4校とも8割以上の児童生徒が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

ウ 成果

○障害の有無にかかわらず、共にスポーツをすることを通じて、楽しく交流をすることができた。また、風船バレーや卓球バレー、ボッチャ等の障害者スポーツの楽しさを味わい、ほとんどの児童生徒が障害者スポーツへの関心を高めることができた。

○スポーツを通じて交流するだけでなく、学校紹介や実施後に感想を述べ合う機会を設定することで、互いの学校のことをよく知ることができた。多くの児童生徒から、また交流会をしたい、もっと回数や時間を増やしたいという感想が聞かれた。

(2) 障害者アスリートとの交流

障害者アスリートとの交流を通じて障害者スポーツに対する関心を高めるとともに、障害についての理解を深め、本校の児童生徒と平川小学校、平川中学校及び西京高校の児童生徒との継続的な交流につなげていくことを目的に、4校の児童生徒が参加して障害者アスリートとの交流会を行った。講師として、リオパラリンピック視覚障害柔道日本代表の廣瀬悠選手と廣瀬順子選手を招聘し実施した。

ア 講演会

前半の講演では、「二人で乗り越えたパラリンピックと障がいの壁」と題し、日頃

の練習の様子、リオパラリンピックでの体験談、私生活でのエピソード等を廣瀬悠選手が廣瀬順子選手にインタビューする形で紹介していただいた。二人が一生懸命練習したり、試合に挑んだりする話に児童生徒は真剣に耳を傾けていた。最後に、児童生徒に向けて「あきらめないで続けること」「感謝する気持ちを持ち続けること」等のメッセージが贈られた。

イ デモンストレーション

廣瀬悠選手と廣瀬順子選手が、視覚障害柔道のルールや技の説明し、西京高校柔道部生徒と打ち込みのデモンストレーションを行った。目が見えない状態で繰り出される技の数々と、ドスンと大きな音がする迫力に、児童生徒からは大きな拍手と歓声が上がった。また、各校の代表者からの質問にも真剣に答えていただき、深い学びの場となった。最後に、会場にいる全員で廣瀬悠選手・順子選手を囲んで写真をとり、温かい雰囲気の中、障害者アスリートとの交流会を実施することができた。

ウ 実施後のアンケート結果

① 体験談を聞いて新しい発見はあったか

本校では7割以上、本校以外では9割以上が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

② 今の自分や将来の生活に役立てようと思うことはあったか

本校が8割以上、平川小学校、平川中学校は9割以上、西京高校は全員が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

③ 障害者スポーツのおもしろさに気づくことができたか

本校が8割以上、平川小学校、平川中学校は9割以上、西京高校は全員が「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。

④ パラリンピックを見てみたいか

本校が7割以上、本校以外では9割以上が、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と回答した。特に西京高校は約9割近くの生徒が「とてもそう思う」と回答した。

エ 成果

○障害者アスリートの体験談を聞いたり、デモンストレーションを見たりしたことで、障害者スポーツや東京パラリンピックに対する関心を高めることができた。

新しい発見があり、あきらめないことや感謝することの大切さを学び、将来に向けての希望をもつことができた。

○障害のある本校児童生徒だけでなく、他校の児童生徒にとっても将来に向けて、夢や希望をもつ機会となった。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

本事業で行った取組を継続し、地域に定着させていきながら、より発展させていくために、今後、以下の点に取り組んでいくことが課題である。

○地域における共生社会の実現に向け、単年度の計画ではなく、計画的に、継続して取り組む必要がある。小・中学校に加え、地域にある高等学校とも交流学习を行い、より地域に根差した活動にしていく。

○障害についての理解をより深めるために、特別支援教育に関する教員研修を行い、各校における事前学習を充実させる。

○交流会において、児童生徒の交流を一層進めるための方法・内容を工夫する。

○本校の「スポレク★くらぶ」の活動との関連をもたせることで、特別支援学校を活用した地域の障害者スポーツの拠点づくりを進めていく。